韓愈の散文作品の立場と「道」の主張

谷口匡

一

韓愈の散文文学と「道」との関係については、古来実に多くの発言がなされており、既に議論を挾む余地がないかのようである。

その問題をここで私がまたとりあげようとするのは、彼の散文作品の中には、「道」との関係では論じきれないものが少なからず存すると思うからである。

例えば、「送李愿帰盤谷序[1]」の中で、

公卿の門に伺候し、形勢の途に奔走す。足は将に進まんとして趦趄し、口は将に言わんとして嚅嚅(しょうじゅ)す。穢汙に処りて羞じず、刑辟に触れて誅戮せらる。万一を徼倖して、老死して後に止むは、その為人において、賢不肖何如ぞや。

というのは、これから盤谷の地にひきこもろうとする親友の李愿[2]の口を借り、世の一般の人々の姿を描いたものであるが、これは李愿の言葉であると同時に韓愈自身の言葉なのであって、世俗の人々のあり方に鋭い批判を投げかけたものとなっている。そして、愈の文学における「道」を、儒家的伝統の中の「道」として規定するとき[3]、この序に見える社会風刺は、そのような「道」の立場から導かれたものではないと私は考える。

また、有名な「師説[4]」の、

弟子は必ずしも師に如かずんばあらず。師は必ずしも弟子よりも賢ならず。道を聞くに先後あり、術業に専攻あり。是くの如きのみ。

という部分は、先生と弟子の関係を合理的に捉えたものにほかならず、これを「道」と結びつけて考える必然性があるであろうか。

「道済天下之溺」(蘇軾)という言葉に代表されるように、韓愈と「道」とが切りはなせないものであると考えられてきたことと、一方でこのような「道」との関わりでは解釈できない作品が書かれていることの、二つの事実の関

係を、どのように考えればよいのだろうか。この問題を、私は、それぞれの作品がどのような立場から書かれたかに留意して、考えてみたい。

二

かつて吉川幸次郎氏[5]が墓誌銘の作品を人間への関心という一点で捉え直して以来、「道」の体系を離れた観点からも愈の文学に注意が向けられるようになった[6]。例えば川合康三氏は「戯れの文学」と題する論文で、愈の行為なり作品が「遊び」の要素を具えていることを論証した上で次のように述べている。

「道」の主張を中心に据えた理論体系を構築して韓愈の文学を明らかにしようとしても、それでは韓愈の本質的な部分がこぼれおちてしまう。……何よりもその根源には、人間に生起する様々な情動をそのまま認め、その自在で奔放な横溢にゆだねる、人間肯定の精神がある。

すなわち川合氏の論は、愈の文学の本質を「道」との関係とは別の面に見出そうとするものである。そして確かに川合氏のいう「人間肯定の精神」によって、生き生きと人間のタイプを描きわけた墓誌銘の作品や、「毛穎伝」（昌黎集巻三十六）「石鼎聯句詩序」（同巻二十一）などの、ユーモアに満ちた作品は説明できる。しかし、冒頭にかかげたような、彼の作品の社会風刺性や合理的側面についてはどうであろうか。また愈の文学と「道」との関係について本質的でないとして、それ以上の言及がないのは物足りなく思われる。

そこで限られた資料からではあるが、愈の文学と「道」との関係について私なりの仮説を提出し、愈が前述のような社会風刺性のある作品を書くことが出来た理由を考えてみたい。そのための手がかりとして、まず、愈自身の墨子及び荀子に対する評価の矛盾の問題を次にとりあげることとする。

三

愈の墨子・荀子に対する評価は作品によって大きく二つに分れる。一つは、これらに肯定的評価を与える方向のもので、「臧孫辰、孟軻、荀卿は、道を以て鳴る者なり。楊朱、墨翟、……皆その術を以て鳴る」という「送孟東野序[7]」のような作品である。この類には他に「読墨子」（墨子を肯定）、「読荀」「進学解」（荀子を肯定）がある[8]。逆に、否定的な論の代表は「原道」であり、それには「周道衰え、

孔子没し、……その道徳仁義を言う者、楊に入らずんば、則ち墨に入る」といい、また「孔子之(道)を孟軻に伝う。軻の死するやその伝を得ず。荀と楊や、択んで精しからず、語って詳らかならず」という。[9] こうした作品には他に「進士策問(其四)」(昌黎集巻十四)「上宰相書」(同巻十六)「与孟尚書書」(同巻十八)(墨子を否定)がある。

この二つのうち一般に愈の立場として認識されているのは後者であろう。すなわち「原道」の立場である。「原道」の中で愈が墨・荀を共に否定するのは当然であろう。なぜなら、この作品は「道」の本源について論じた論文であって、この中で説かれる堯から孟子までの道の伝統がいわゆる「道統」であり、道統論の体系の中では孟子以外の諸子は斥けられてよいからである。愈がこのような堅固な思想体系を持つかに見えて、その実、先にとりあげたようにある一群の作品では全く正反対の立場を述べているのはなぜであろうか。

こうした愈の矛盾は、つとに季鎮淮氏によって指摘されているが、[10] 季氏はその原因を当時の社会矛盾の反映であるとする。また、童第徳氏の「韓愈文選」もこの問題にふれているが、[11] 書かれた時期による意見の相違であろうとするのが、童氏の見解である。しかし私は、これら二氏とは別の原因と考えたい。すなわちいずれにしろ二氏の見解では、韓愈の矛盾は無意識的なものとされるが、私はむしろ意識的なものであると思う。

こうしたことを考えるのにヒントとなるのは、それらの作品がどのような立場で書かれたかということである。愈が永貞元年に兵部侍郎李巽に差し出した書簡「上兵部李侍郎書」に「謹んで旧文一巻を献ず。教道を扶樹して、明白にする所有らん」[12] と言う。朱熹の考異では、それは原道・原性・原毀・原人・原鬼のいわゆる「五原」の諸篇を指すとする。[13] これに従えば、「原道」はいわば行巻に用いる詩文同様に、自分を売りこむために書かれた作品といえる。では他の「原道」と同じ主張をもつ作品「進士策問」「上宰相書」「与孟尚書書」についてはどうか。

まず「進士策問」は作品というよりも、進士の試験問題として愈が書いた問題文であり、公的な文書に属する。また「上宰相書」は三度目の博学宏詞科の受験に失敗した貞元十一年、時の宰相に宛てて、自らが採用されてよい人物であることを説いたものである。更に「与孟尚書書」は、潮州時代(元和十四年)大顛という僧と交遊していたために、愈に仏教を信仰しているという評判が立ち、後(元和十五年)に工部尚書の孟簡がそのことを手紙で問い質して

きたのに対する返信であって、自分の立場は依然として伝統的儒家思想を尊ぶものであることを弁明したものである。従ってこれら三つの作品は公的な発言であるか、あるいは自己の立場をはっきりと打ち出しておく必要から書かれたものといえるのである。よってそこには、「原道」と同じ心理が働いているのではなかろうか。

これに対し、その逆の立場のものはどうであろうか。「送孟東野序」は親友孟郊のために書いてやった序文であり、ここには愈独自の大胆な文学論が形成されている。「与陳給事書」（昌黎集巻十七）に「送孟郊序一首」と名前が見えることから当時給事中であった陳京に贈ったことが分かるが、「清書し直す暇がなかった（不能挨更寫）」と言うように、最初からその人に与える目的で書かれたものではない。また「読墨子」「読荀」は、それぞれ墨子、荀子を読んだ際の読書ノートのようなものであり、自らの率直な感想を書きつけたものである。また「進学解」は元和七、八年頃、三度目の国子博士に降格となった時の作品であり、自己の不遇を動機とし、東方朔の「答客難」や揚雄の「解嘲」に倣い、問答形式を用いて公正な人材登用を訴えた文章である。しかしこれも誰かに直接差し出したものではなく、自らの不満を文学作品として結晶させたものであろう。従って以上の四作品は「原道」などに比べてより私的な発言なのである。

ここから私は次のような仮説を立ててみたい。すなわち、愈が四つの作品で墨・荀に対して否定的な立場をとったのは意識的なものであって、「原道」に代表される、儒家正統思想の信奉者としての立場と矛盾がないように議論を整えたのだと考える。これに対し、他の四つの作品は公的なものではないため、そうした気をつかう必要がなく、本音に近い言葉を吐くことができたのである。

つまり、愈は作品によっては、公における自分自身の立場を表現せざるを得なかった。従って、より私的な立場で書かれた作品と比較すると、内容の矛盾が生じるのである。

ではこれを「道」との関わりでみれば、どのようなことが言えるであろうか。私はそれを、彼が友人に宛てた書簡を中心に述べてみようと思う。

四

明の徐師曽の「文体明弁」は、書簡体の文章について、「書記の体、本は言を尽くすに在り。……若し夫れ尊卑序有り、親疏宜しきを得るは、是れ又た節文の間に在り」と

言う。[14] つまり、書簡とはその人の真実をのべ尽くすのと同時に、身分や親疎に応じて修飾の度合いが変わるべきものである。従って真実は最も親しい友人であるほど露わに述べられるであろう。韓愈文学の素顔もそうした部分に窺えるのではあるまいか。

愈の文集で、書簡と呼べるものは、全部で五十八篇[15]存する。しかし、大半は上官か後輩に宛てたもので、友人への書簡は多くはない。

私はまず、愈が上官に宛てた書簡について簡単に述べておきたい。

「上賈滑州書」は現行の文集に収められる愈の書簡の中では最も早い時期に書かれたものである。賈滑州とは当時滑州刺史兼義成軍節度使であった賈耽のことであり、この書簡は愈がまだ進士にも合格していなかった二十三歳の時に出されているが、その中で早くも、

愈は儒服する者なれば、敢えて他の術を用て進むを干(もと)めず。[16]

と、自らの立場を明らかにしている。また、貞元十一年、時の宰相に宛てた書簡「上宰相書」では、

その読む所は皆聖人の書にして、楊墨釈老の学、その心に入る所無し。[17]

という。これも述べるところは「上賈滑州書」と同じである。すなわち、いずれも自分が儒家の伝統の継承者であることを強調するものなのである。

このように、自分自身の立場についてはっきりと述べようとする傾向が上官に宛てた書簡には見られるが、それは弟子や後輩に与えた書簡の場合も同様なのである。例えば、「韓門」の一人に数えられる張籍が、師の韓愈の議論好きな態度を戒めた書簡を出した時も、愈はそれに答えた「答張籍書」の中で、

僕、聖人の道を得て之を誦するより、前（釈老）の二家を排すること年有り。[18]

と、自分自身の立場を明らかにして、議論という行為の正当性を主張している。また、愈を慕って集まってくる後輩たちに向かっても、「抑(そもそも)々能く言う所の者は皆古えの道」（答尉遅生書）[19]、「愈の志は古えの道に在り」（答陳生書）[20]といって、自分が拠って立つ所がどこに在るかを示してみせる。

ところが、友人に宛てた書簡ではそうではない。それを、次に詳しく述べてみたい。

五

一口に「友人」といってもその基準はさまざまである。ここでは、私はひとまず科挙の登第の年が同じであることを第一の目安として考えたい。いわゆる同年の進士である。唐代の同年進士について、清の顧炎武の「日知録」に次のような記事があり興味深い。

今人同じく挙せらるるを以て同年と為す。唐の憲宗、李絳に問いて曰く、人の同年に於けるや、固より情有るかと。対えて曰く、同年は乃ち九州四海の人、偶々(たまたま)科第を同じうし、成いは科に登って然る後に相識るのみ。情、何に於てか有らんと。然れども穆宗、皇甫鎛を誅せんと欲するに、宰相令狐楚・蕭俛、同年の進士を以て之を保護す。[21]

これは同年の進士であるがゆえの結びつきが決して弱くないことを示す。また、科挙の及第者たちは知貢挙を座主と称し、自らは門生と名乗って党派を作ったという。このことから、「同年」どうしの結合も当然密接であったことが想像できる。[22]

愈は貞元八年に進士に合格しているが、徐松の「登科記考」によれば、この年には他に二十二名の合格者がいる。その中で愈の出した書簡が残っているのは、侯継、崔群、馮宿、李絳の四人についてであり、[23]すなわち「答侯継書」(昌黎集巻十六)「与崔群書」(同巻十六)「答馮宿書」(同巻十七)「与馮宿論文書」(同巻十七)「与華州李尚書書」(同巻十九)の五篇である。それに加えて、孟郊に宛てた書簡「与孟東野書」(同巻十五)もこれらと同列にとりあげてよいであろう。孟郊は、普通はいわゆる「韓門」の弟子の一人として数えられている。しかし、愈自身が孟郊に対して弟子以上の特別の尊敬をもっていたことは、その人のために書いた序文「送孟東野序」の中で、彼の文学を同じ門人の李翺や張籍より一段高く評価し、[24]李白・杜甫、あるいは同年の李観に匹敵させていることや、「答楊子書」の中で「友朋の中に、敬信する所の者は、平昌の孟東野なり」[25]と言っていることから知られるのである。

この合計六篇の「友人」への書簡について年代順にとりあげてみたい。

(一)答侯継書

この書簡は貞元十一年、三度目の博学宏詞科の受験に失敗した時のものである。従って文面は悲観的色彩に満ちる。こうした状況となっては暫らく退帰して勉強し直したい、ということを述べて、

行々自ら念えらく、方に当に遠く去って、深きに潜れ隩(くま)に伏して、時世と相聞かざるべしと。……今幸いに

時の用うる所と為らずして、朝夕役役の労無し。将に試みに学ばんとす。力足らずして而る後に止まん。猶お将に時俗の争う所に汲汲として、既に得ずして天を怨み人を尤むる者に愈らんとす。此れ吾が今の志なり。[29]

という。ところが愈はその直後に時の宰相に宛てて三通の書簡を出しており、[30]自分を官吏として採用するように要請している。その中では当然のことながら、隠遁ということに対して、これを正面から拒否する態度をとっている。いま三通目の書簡「後廿九日復上書」から引用すれば、

士の道を行う者、朝に得ざれば、則ち山林のみ。山林は、士の独り善くし自ら養う所にして、天下を憂えざる者の能く安んずる所なり。如し天下を憂うるの心有らば、則ち能わじ。[32]

という。

この二つの矛盾した態度のうち、これまでは後者のみが愈の立場を述べたものとして引かれなかったであろうか。そして前者の態度は一種のポーズとして見過ごされてきた。[33]しかし、その差し出した相手を考えれば、ポーズをとるとすれば、むしろ後者においてではあるまいか。

(二)与馮宿論文書

馮宿と愈は、貞元年間にはともに張建封の部下であった。更に「旧唐書」馮宿伝には「会々韓愈、仏骨を論ず。時の宰、宿が疏を草せしを疑い、出されて歙州刺史と為る」[34]という記事が見え、のちに愈と相当親しかったことが窺える。この書簡は貞元十四年の作であるから、まだ愈が董晋の幕下にいて、張建封の部下でなかった時期のものである。

この書簡に於ても悲観の色は濃い。その冒頭でまず馮宿から贈られた賦一首について、努力すれば古人の域に達するとほめつつ、しかし古人のようであるからといって今の世に受けいれられるとは限らない、として、自己の体験を次のように記す。

僕文を為ること久し。毎に自ら意中に則って以て好しと為せば、則ち人必ず以て悪しと為す。小しく意に称えば人亦た小しく之を怪しむ。大いに意に称えば即ち人必ず大いに之を怪しむ。……知らず、古文の直ちに何ぞ今の世に用いらるるを。然れども以て知者の知るを俟つのみ。[35]

これは自己の経験した厳しい現実をそのまま写したものである。しかし、それと同じことをその三年後、後輩の李翺に宛てて自らが古文の文体を確立するまでの過程を説い

た書簡「答李翊書」では、

その心に取って手に注くるに当たるや、惟だ陳言を之れ務めて去く。戛戛乎としてそれ難いかな。それ人に観すや、非笑の非笑たるを知らざるなり。是くの如き者亦た年有り。猶お改めずして、然る後に古書の正偽と、正と雖も至らざる者とを識る。……それ人に観すや、之を笑えば則ち以て喜びと為し、之を誉むれば則ち以て憂いと為す。その猶お人の説く者存するを以てなり。是くの如き者亦た年有り。然る後に浩乎としてそれ沛然たり。[32]

という。この書簡の発言は自信に満ちている。「いつも自分の思い通りにうまくできたものについて、世間の人は必ずそれをよくないと言った」というさきの書簡の現実は、「自分の文章を人に示すと嘲笑を買ったが、それが嘲笑であることに気がつかなかった」「自分の文章を人に示したとき、笑われれば却って意を安んじ、褒められれば却って不安となった」というように書き改められている。これはその当事者であった時期からある時間を経ていることと、李翊という一人の門弟の前での発言であることなどが作用した故の、余裕あることばに他ならない。文学批評史上、韓愈の文学理論を説く際に必らずとりあげられるのがこの書簡であるが、その一語一語がそうした余裕の中で吐かれたものであるということは、友人馮宿に宛てた書簡を読むことによって、はじめて指摘できるのである。

㈢与孟東野書

これは貞元十六年、すなわち張建封の部下の一人として徐州に在った時、常州にいた孟郊に宛てて書かれた書簡である。この中で愈は、友人孟郊について、

足下才高く気清し。古えの道を行なって、今の世に処る。田無くして衣食し、親に事えて左右違う無し。足下の心を用うること勤めたり。足下の身を処くこと労して且つ苦しめり。混混として世と相濁り、独りその心古人を追って之に従う。足下の道それ吾をして悲しましむ。[33]

と述べ、「ごたごたと俗世間と共に濁りながら、その心だけは古代の人々に追い従っている」と彼を褒めたたえている。しかしこれは「古えの道」が「今の世」にいれられないことが強く意識されたことばなのであって、だからこそ「あなたのそのような生き方は私を悲しませる」と友に言う。ここでも愈は悲観的現実をそのままに記しているのである。

㈣与崔群書

この書簡は四門博士時代の貞元十八年に書かれたものである。愈と崔群の交情の深さを示すものとしては、まさにさきの「日知録」と同様の例が「通鑑」（巻二百四十）に見える。それは元和十四年、「論仏骨表」を奉って憲宗の怒りにあい、死罪を言い渡されようとした時、当時重臣であった裴度と崔群が愈のために発言してかばったことで、死罪を免がれ、潮州への流罪ですんだという記事である。また「唐摭言」（巻四「師友」）でも、これからとりあげる愈の「与崔群書」を引用し、二人が親しかったことを言う。

この書簡は、童第徳氏の「韓愈文選」の中で指摘されているように「与孟東野書」と風格がよく似ている。童氏が指摘する類似点の一つは、二つの書簡がともに隠遁への憧れを述べることであって、崔群・孟郊が愈にとって最も気ごころの知れた友人であったからこそ、こうした「偕隠終老」の気持ちが述べられたのであると言う（四三頁）。

つまり「与孟東野書」で悲観的現実をそのまま書きつけようとした態度は、ここに於ても濃厚である。それゆえにこそ、この書簡にあって次のごとき懐疑も述べられるのである。

古えより賢者少なく、不肖者多し。事を省せしより以来、又た賢者恒に不遇にして、不賢者比肩して青紫、賢者恒に以て自ら存する無く、不賢者志満ち気得、賢者卑位を得と雖も則ち旋やかにして死し、不賢者或いは眉寿に至るを見る。知らず、造物者の意竟に如何、乃ち好悪する所、人と心を異にすること無からんや。又た知らず、乃ち都な省記せずして、その死生寿夭に任すこと無からんや。[34]

これは、造物者すなわち天に対する懐疑である。物心ついて以来見てきた現実、それは「不賢者」に甘く、「賢者」には厳しいものであった。そうした現実を容認する天の意はいったいどのようなものか、われわれ人間とは善悪の判断基準が異なっているのか、それとも世のあるがままに任せっきりなのか。こうした天への疑問は、眼前の現実に対する強い不満と表裏一体のものであって、かく不如意な現実をそのままに反映させている点に、この書簡の特色はあるであろう。

(五)答馮宿書

これは元和二年に書かれている。愈と馮宿が親しい関係にあったことは(一)で述べた通りであるが、この書簡を読めば、この時期に至っては親密さが増していたことが知られる。まず、「僕が闕けたる所を垂示せらる。情の至れるに

非ずんば、僕安んぞ此の言を聞くを得ん[35]」という冒頭の文から、馮宿が愈に対して「闕けたる所」を指摘する書簡を出していることがわかるし、また別の部分で「足下時に僕と居り、朝夕に出入起居を同じうすれば、亦た僕が不善有るを見るや[36]」というのも、二人の親密な関係を示す資料である。この書簡はそうした親友の指摘に対して反論するものではなく、それに感謝し、自身の苦境を正直に吐露したものである。この書簡が書かれた元和二年、愈は洛陽に勤務していたが、洛陽に移る前は、権知国子博士として長安に一年いた。その頃のことを回想して、

京城に在りし時、囂囂たる徒、相誉ること百倍せり。……僕、京城に在ること一年、一たびも貴人の門に至らず。人の趨く所は、僕が傲する所なり。己れと合う者は、則ち之に従って遊び、合わざる者は、吾が廬に造ると雖も未だ嘗て之と坐せず。此れ豈に徒らに謗りを致すに足るのみならんや。人に戮せられざること、則ち幸いなり。[37]

とこの書簡では言っている。貞元十四年の「与馮宿論文書」は文学について論じたものであったが、この元和二年の書簡はひたすら現在の苦境を写すのに急である。こうした内容の変化は、二人の友人関係の進展と関連するものといえよう。

(六)与華州李尚書書

華州李尚書というのは、李絳のことである。「旧唐書」(巻百六十四)の伝によれば、元和九年、礼部尚書を授けられ、十年、検校戸部尚書に任ぜられたのち地方へ出され、華州の刺史となる。愈が「与華州李尚書書」を出したのはこの時であって、当時、考功郎中兼知制誥であった。

書簡は、友人の現在の地位がめぐまれぬのを思いやったものである。「華州は実に百郡の首にして、藩維に重しと雖も、然れども閣下之に居ることは、則ち所を失えりと為す[38]」と、任地が友人に不つりあいであることを述べたあと、

過客俗子に接するに、口を絶って時事を挂けず、務めて崇深を為し、以て嫉妬の口を拒止せよ。[39]

という。つまり、旅人や俗人の前では政治についての論評を慎しみ、行いを高尚にし、妬まれないよう友人に注意を喚起したものである。これは、愈自身がそうした注意を怠ったために、誹謗や中傷を受けた体験を踏まえた発言と思われる。

六

以上論じたように、韓愈が友人に宛てて書いた書簡の言葉は、あくまでも自分の体験した現実を体験したままに忠実に写そうとしたものである。いわゆる「道統論」のごとき抽象的議論はここでは見出されない。

この事実は次のように考えられないであろうか。すなわち、愈は上官・後輩など交流上においてある一線を画すべき人々に対しては、儒家的な「道」を載せた文章を書くことで自分の立場を示したのである。こうした文章が彼自身を強く押し出した作品であると考えるのは正しくない。真実の愈は、むしろ、改まって「道」を説く必要のない、友人に宛てた書簡にこそ窺えるのである。

そして、「原道」のように自分を売りこもうとして書かれたものを除けば、「雑著」の作品の多くは、世の中についての不平不満を動機として、韓愈が自分自身のために書いたものである。もし、自分自身のため、というのが言いすぎであるとしても、少なくとも、特定の個人に気をつかって書かれたものではない、とは言えるであろう。すなわち、ここでも「道」を敢えて説く必要はないのであって、友人に宛てた書簡と同様の、自由な立場で文章が書かれていると考える。従ってそこには、友人への書簡に見られたような執筆態度——現実を現実として彼自身の眼によって見据えていこうとする態度が貫かれているのではなかろうか。冒頭に取りあげた「送李愿帰盤谷序」の場合も同様であって、李愿のような親しい人を送った序文であったということが、世俗を批判する発言を容易にしているのである。

愈はこうした側面を持ちながらも、時に自らの立場を示すものとして「道」を鼓吹せざるを得なかった。それは、彼が一生の大部分を中央の官僚として、あるいは、古文運動グループの領袖としてすごしたことに関係している。長く左遷され、一地方官として生涯を終えた柳宗元が、独自の立場から社会風刺の作品を多く書くことが出来たのとは対照的である。

愈の文学の「素顔」をさきに述べたような現実直視の一面に認めるとするならば、「道」を主張する作品は「仮面」に喩えることも可能である。それらの作品が、多分に意識的に自らを装う性質を持つことは否定できないであろう。

韓愈の散文文学が「道」を主張する側面とそうでない側面を合わせもつのは、それぞれの作品がどのような立場で書かれたかということと深く関わっているのである。

（注）

① 「昌黎先生集」巻十九。原文「伺候於公卿之門、奔走於形勢

之途。足將進而趦趄、口將言而囁嚅。處穢汙而不羞、觸刑辟而誅戮。微倖於萬一、老死而後止者、其於爲人賢不肖何如也」。テキストは馬茂元整理「韓昌黎文集校注」（上海古籍出版社、一九八六年）を用いたが、巻数は東雅堂本「昌黎先生集」（以下昌黎集）によって示した。

② 韓愈と李愿が親しい関係にあったことは、清水茂「唐宋八家文」上（朝日新聞社、一九六六年）五六～五七頁を参照。

③ 郭紹虞「中国文学批評史」（上海古籍出版社、一九七九年）一三一頁にも「他所謂道是儒家之道」と言う。

④ 昌黎集巻十二。原文「弟子不必不如師、師不必賢於弟子、聞道有先後、術業有專攻、如是而已」。

⑤ 「韓愈文」（吉川幸次郎全集第十一巻）

⑥ 清水潔「韓愈の文学における諧謔とユーモア」（「懐徳」三十二号、一九六一年）、松本肇「韓愈――主情性の文学」（加賀博士退官記念中国文史哲学論集、一九七九年）、川合康三「戯れの文学――韓愈の「戯」をめぐって」（日本中国学会報第三十七集、一九八五年）など。

⑦ 昌黎集巻十九。原文「臧孫辰孟軻荀卿以道鳴者也。楊朱墨翟……皆以其術鳴」。

⑧ それぞれ昌黎集巻十一、巻十一、巻十二。なお蘇軾は愈の「原人」の中にも墨子の兼愛説と矛盾しない論があるとし（経進東坡文集事略巻八「韓愈論」）、季鎮淮氏の論文（後述）も賛同するが、意識的な同調ではないと思われるので、今「原人」はとりあげない。

⑨ 昌黎集巻十一。原文「周道衰、孔子沒、……其言道德仁義者、不入于楊、則入于墨」。又「孔子傳之孟軻、軻之死、不得其傳焉。荀與楊也、擇焉而不精、語焉而不詳」。

⑩ 「韓愈的基本思想及其矛盾」（人民文学出版社、一九八〇年）二一九頁。

⑪ 童第德選注「韓愈文選」（人民文学出版社刊「文学研究」一九五八年一期）

⑫ 昌黎集巻十五。原文「謹獻舊文一卷、扶樹教道、有所明白」。

⑬ 「昌黎先生集校異」巻四。一九八五年上海古籍出版社影印本一二七頁。

⑭ 巻三十一、書記上。原文「書記之體、本在盡言。……若夫尊卑有序、親疏得宜、是又存乎節文之間」。

⑮ 昌黎集巻十四「答張籍書」から巻十九「京尹不台参答友人書」までの五十篇及び、外集、遺文等に含まれる「上賈滑州書」「上考功崔虞部書」「与少室李拾遺書」「答劉秀才論史書」「与大顛書」「答侯生問論語書」「皇帝即位賀宰相啓」「上張徐州薦薛公達書」の八篇を「書簡」の範囲とした。

⑯ 外集巻二。原文「愈儒服者、不敢用他術干進」。

⑰ 昌黎集巻十六。原文「其所讀皆聖人之書、楊墨釋老之學無所入於其心」。

⑱ 昌黎集巻十四。原文「僕自得聖人之道而誦之、排前二家有年矣」。

⑲ 昌黎集巻十五。原文「抑所能言者、皆古之道」。

⑳ 昌黎集巻十六。原文「愈之志在古道」。

㉑「日知錄」巻十七「同年」の条。原文「今人以同舉爲同年。唐憲宗問李絳曰、人於同年、固有情乎。對曰、同年乃九州四海之人、偶同科第、或登科然後相識、情於何有。然穆宗欲誅皇甫鎛、而宰相令狐楚蕭俛、以同年進士保護之矣」。

㉒ 傅璇琮氏は「唐代科挙与文学」（陝西人民出版社、一九八六年）の中で、座主と門生が互いに依存していた事例を幾つかあげたのち「這就是自從中唐時興起来的座主与門生之間、以及同年之間、因利害相関形成的新的官僚網」（同書二四二頁、傍点引用者）という。

㉓ 崔群、李絳の二人とは、進士にあがる以前から、共に梁肅に師事していた縁での知りあいであったことが「唐摭言」（巻七「知己」）に見える。

㉔ 清水茂氏の解釈（「唐宋八家文」上　三七～三八頁）に従う。

㉕ 昌黎集巻十五。原文「友朋之中、所敬信者、平昌孟東野」。

㉖ 原文「行自念方當遠去、潛深伏隩、與時世不相聞。……今幸不爲時所用、無朝夕役役之勞、將試學焉。力不足而後止、猶將愈於汲汲於時俗之所爭、既不得而怨天尤人者、此吾今之志也」。

㉗「上宰相書」「後十九日復上書」「後廿九日復上書」（ともに昌黎集巻十六）

㉘ 原文「士之行道者、不得於朝、則山林而已矣。山林者、士之所獨善自養而不憂天下者之所能安也。如有憂天下之心、則不能矣」。

㉙ 例えば前野直彬他「韓退之」（集英社、一九八三年）六八頁を参照。

㉚ 旧唐書巻百六十八。原文「會韓愈論佛骨、時宰疑宿草疏、出爲歙州刺史」。

㉛ 原文「僕爲文久、每自則意中以爲好、則人必以爲惡矣。小稱意人亦小怪之。大稱意卽人必大怪之也。……不知古文直何用於今世也。然以嫉知者知耳」。

㉜ 昌黎集巻十六。原文「當其取於心而注於手也、惟陳言之務去、戛戛乎其難哉。其觀於人、不知其非笑之爲非笑也。如是者亦有年、猶不改、然後識古書之正僞、與雖正而不至焉者。……其觀於人也、笑之則以爲喜、譽之則以爲憂、以其猶有人之說者存也。如是者亦有年、然後浩乎其沛然矣」。

㉝ 原文「足下才高氣清、行古道、處今世。無田而衣食、事親左右無違。足下之用心勤矣、足下之處身勞且苦矣。混混與世相濁、獨其心追古人而從之、足下之道其使吾悲也」。

㉞ 原文「自古賢者少、不肖者多。自省事已來、又見賢者恆不遇、不賢者比肩青紫。賢者恆無以自存、不賢者志滿氣得。賢者雖得卑位則旋而死、不賢者或至眉壽。不知造物者意竟如何、無乃所好惡與人異心哉。又不知無乃都不省記、任其死生壽夭邪」。

㉟ 原文「垂示僕所闕、非情之至、僕安得聞此言」。

㊱ 原文「足下時與僕居、朝夕同出入起居、亦見僕有不善乎」。

㊲ 原文「在京城時、鬻鬻之徒相訾百倍。……僕在京城一年、不一至貴人之門、人之所趨、僕之所傚。與己合者則從之遊、不合者雖造吾廬未嘗與之坐。此豈徒足致謗而已、不戮於人則幸也」。

㊳ 原文「華州雖實百郡之首、重於藩維、然閣下居之、則爲失所」。

㊴ 原文「接過客俗子、絶口不挂時事、務爲崇深、以拒止嫉妬之口」。

（筑波大学大学院）